

# パンタナル通信

南北米福地開発協会 会報 2006年5月1日発行 第32号



母牛の移動と共に群がる白い鳥達（レダ牧場にて3月撮影）

## レダの近況と今後

南米のレダは、この時期、夏から秋に移りつつある季節です。暦の上では、雨期が終わり、乾期に入っていますが、今年はまだ時折雨が降っています。日中陽射しの中であれば、焦げるような暑さはあるものの、木陰に入れば涼やかな安らぎを覚えます。朝晩は寝苦しいことも無く、快適な夜を楽しめます。レダの建設現場は、展望台ビル（仮称）の建設が進められ、二階のフロアのコンクリート打ちが終わりました。

三階建ての上に二階分を重ねた地上十八mの高さの展望台が建てる予定で、それが完成すると日の出が本流から、夕陽が支流に沈んで行く、千変万化の美しい世界を見ることが出来ます。夜は満天の星空を三六〇度眺め、晴れた日にはブラジルの山も彼方に見ることが出来ます。大小様々な沢山の鳥や動物達を観察することができ、エコツアーハイ最高です。

フィッシングは、釣りキチ、憧れの黄金の魚ドラドをはじめ、陸地からも、ボートで川に出ても、今の時期様々な魚が自由に釣れます。農園は、サトウキビや各種野菜が沢山育てられ、田んぼでは

二回目の稻の収穫をすべく、稻田が色づき始めています。ココヤシの苗も三百本ほど植えられて、将来のヤシ油を採集する準備が進められています。ひまわりの種も種まきを準備しています。地球環境を考え、軽油、ガソリンの代わりに、植物工タノールを抽出し、公害の少ない燃料に切り替えていく計画が進められています。

自活の燃料だけでなく、対外的にも販売して、経済自立の道も見通しています。

植樹活動も、第一、第二植樹園、果樹園、そして奥地へ続く道路の街路樹へとどんどん進められています。既に三千本以上の苗木が、大きく育っています。

今や荒地が、庭園のように美しい憩いの場を、人にも動物にも提供しています。

牛たちも、かつては、草が充分食べられず瘦せていましたが、今では橋が出来たお陰で、支流の河川敷が大草原となっているところへいくる為、沢山食べて口口口にして来ています。

子牛が次々と生まれているお陰で、美味しい牛乳やヨーグルトが、毎日提供されています。

## パラグアイの蒸気機関車に乗る！

（飯野記）

四・一（日）、アスンシオンのレトロ・蒸気機関車に乗った。今後のツアーリーの参考にと思い、体験記をまとめてみた。

今日は快晴、気候もそれ程暑くないピクニック日よりだ。九時にアスンシオン宿舎をタクシーで出発、昨年出火で焼失したスーパー・マーケットの前を通り過ぎ、街の北東にあるボタニカル・ガーデン（植物園）のある所を直角に曲がるアルティガス通りに沿って走ること十五分程で、始発のボタニコ駅に着いた。

既に汽車は釜に薪が放り込まれ、煙を上げ、蒸気を吹き出し、スタンバイの様子。切符を一人二十ドルで購入、厚手のボール紙に印刷された昔懐かしい切符のスタイルだ。ボタニコ駅十時発、三十分程でルケ駅、三十分休憩して、終点アレグア駅に十二時に着くといふ。アスンシオンから東によそ三十KMくらいの距離だ。出発十五分前では、準備が進められていて乗車は出来ない。そこで、暫く機関車を撮影したり、眺めたりしていると、早く乗りたくなつてくるから不思議だ。パラグアイ鉄道創立の千八百六十一年の数字を記した機関車の顔は、正面から

見ても、斜めから見てもさすがに様になつていて心を躍らせる。

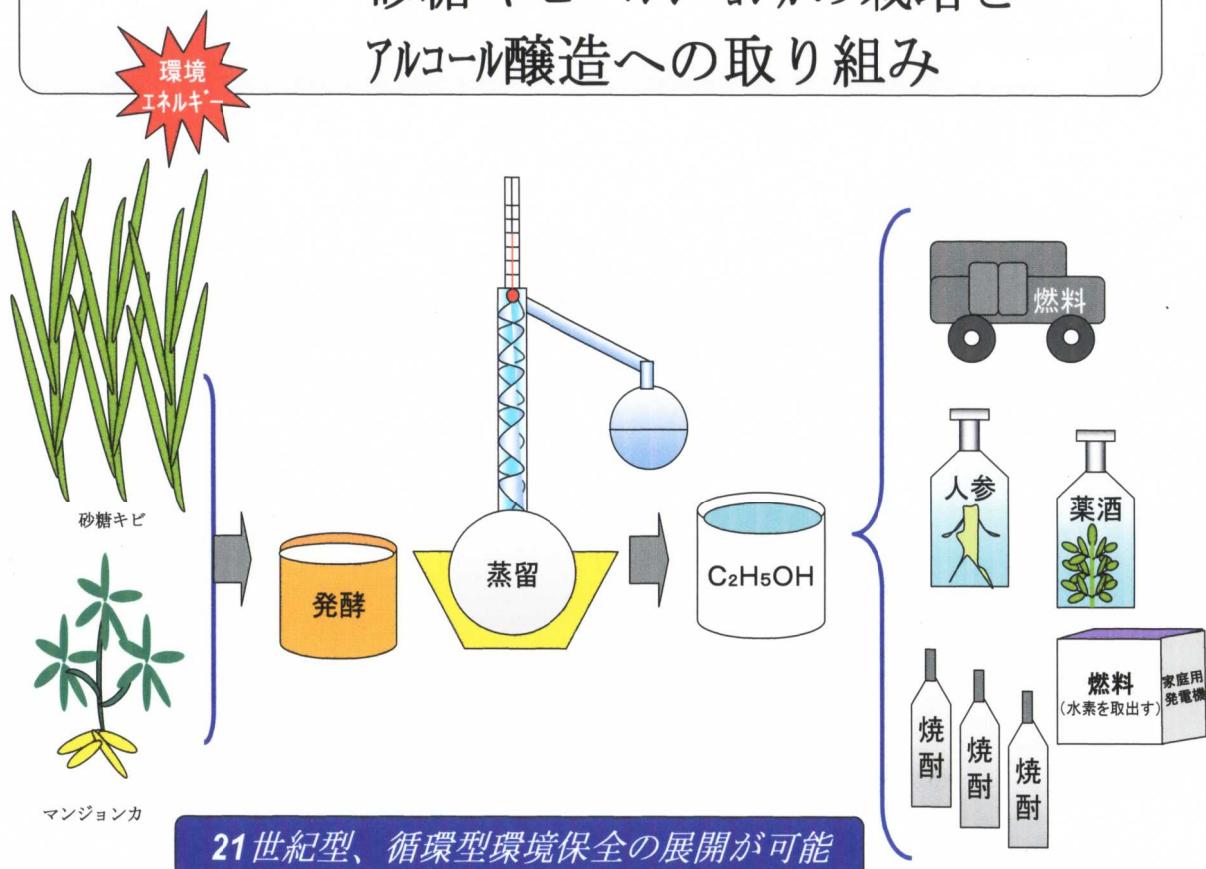
やがて、出発の合図が叫ばれて、乗客の列が出来、切符のチェックを小奇麗な係りのお姉さんがして、いよいよ乗車だと思つたら、駅の中が博物館になつていて、創設時の関係者の古ぼけた白黒写真や列車の写真、当時の掛け時計、通信機、水飲み場、などが一部屋にわたつて展示してあり、当時のものと思われる服を着た坊主頭のおじさんが愛想よく案内説明をしてくれ、ささやかなパラグアイにおける鉄道の歴史を学ぶ事が出来た。

ひとしきりそれが終わると今度こそ本当に乗車だ。家族連れや、若いカップルや外国人の旅人など様々な乗客五十名ほどが2両編成の小豆色のベンキで塗られた木製車両にそれぞれ騒めきながら席を占めていく。

やがて汽笛が一際大きく長く鳴つて、駅長が鐘を鳴らし、駅で見送る人々の叫び声、窓から手を振る乗客の歓声、そして最後までシャッターを切つているカメラマニアと思われる青年が車掌にせかされて乗り込むと、蒸気を吐き出す音と共に、汽車は動き出した。汽車の轟かなゴトン、ゴトンといふ音と、甲高い汽笛の音を響かせて、ささやかな煙が開け放たれた窓から流れ込み、興奮が高まる。石炭と違つて、ススや黒煙はほとんどない。やがて車内放送があり、簡単な説明が3分ほど。（別紙に続く）



## 砂糖キビ・マンジョンカの栽培と アルコール醸造への取り組み



### 砂糖キビ・マンジョンカの栽培とアルコール製造への取り組み（中田先生推奨）

- (1) 21世紀型、循環型環保全の展開が可能となります。
- (2) 化石燃料は、地球環境を壊して行きます。  
もうすぐ太平洋の小さな島が海に飲み込まれる、あるいは北極圏の永久凍土がどんどん溶け、白熊等の希少動物の生態系に危機的な影響を与えてています。
- (3) パラグアイの隣国ブラジルでは、ガソリンにアルコールを混合することが義務付けられ、砂糖キビは大量にアルコール製造にまわされております。  
このままでは、日本の台所から砂糖がなくなるのは近いと見なければなりません。  
このことは、最近NHKで2回放映しておりました。
- (4) レダは、砂糖キビ・マンジョンカが無限大に栽培できる環境があります。  
この最高の立地条件を逃す手はありません。そして、砂糖キビ・マンジョンカは“換金作物”的なトップランナーと成り得ます。
- (5) 砂糖キビ、マンジョンカ栽培から、大きな波及効果が期待できます。  
アルコール製造が軌道に乗った場合、原料の供給を、現地の人々から調達することで、現地の人々の現金収入を飛躍的に伸ばすことができます。  
レダ産、薬酒・人参酒・焼酎等、エコツアーに来られた観光客の良い土産になります。

（吉澤忍氏の報告より）

# 地球の資源にはどのようなものがあるか

## 再生できる資源と できない資源

人間が生きていくのに役に立つたり、必要なものを資源という。地球の資源には、使用すると、二度と手に入らないものと、再生して何度も使うことができるものとがある。

## 再生できる資源

●生物資源  
植物、動物、微生物などの生きものは、再生できる資源の代表だ。生態系を破壊しないように管理していけば、森林は、太陽の光と水で

十分にふやし、育てることができる。森林などの環境がきちんと残つていけば、微生物も生きていけるため、自然を浄化するはたらきが低下するのを防ぐことができるのだ。

### ●遺伝子資源

ヒトはヒトから、イヌはイヌから生まれたり、子が親に似るのは、細胞の中に親の形質をうけつて設計図みたいなものがあるからだ。これを遺伝子とよぶ。

生物は地球上に生命が誕生して以来、遺伝子の数を増やしてきた。だから1個の細胞の中にある遺伝子をすべて解明できれば、生命誕生以来

の貴重な情報をえられることになる。現在は遺伝子を操作して、人間だけでなく多くの生物の生活に役立てようとして研究が進められている。

多くの動植物は、人間の食料や医薬品などの原料として利用されている。また、現在は利用されていないでも、将来利用される可能性をひめている。こうしたことから、地球上のすべての生物は、遺伝子資源ともよばれている。

### ●水資源

水は人間にとってもつともたいせつな資源だ。飲み水や浄水、かんがい用水、工業用水、水力発電などに利用されている。

水は利用しやすい資源だけに、使

いかたでたちまち汚染されてしまう。汚染された水を浄化して、再生するには、森林や土壤といったまわりの環境の力が必要だ。

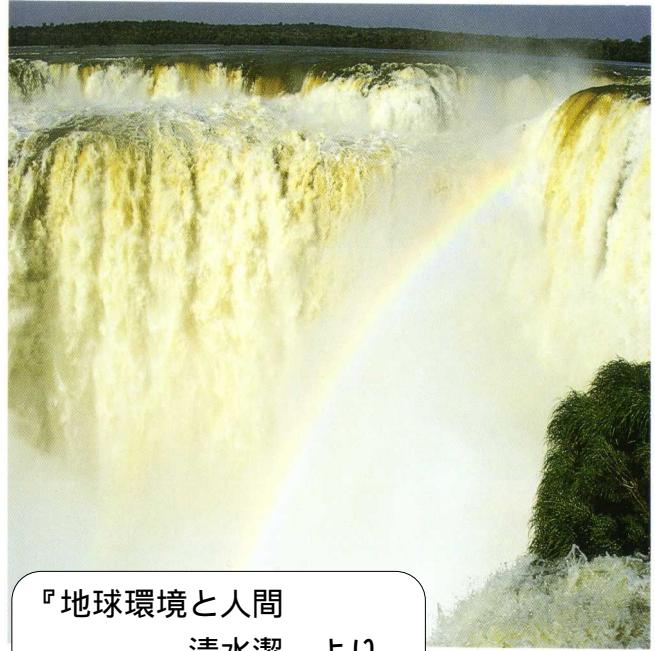
### ●土壤資源

植物や動物を育て、水を浄化し、汚物を処理するのは土だ。土は、あってあけば失われていくものだ。その再生には数千年もかかるといわれている。すぐには再生できない資源なのだ。

多くの文明は、豊かな土と水にめぐまれた大河の流域に生まれた。逆に土がもっている生産力を失った文明は滅びている。

▼ブラジルのイグアスの滝  
は下流の農地や貯水池をうるおす。

生物のからだは、たくさんの細胞の集まりでできている。



『地球環境と人間  
清水潔』より

会員納入	電話	〇四四一八二九一二一八二二
一〇一八〇一七七六八〇四七一	Fax	一〇一三一〇〇〇一
代表 柴沼邦彦	神奈川県川崎市高津区	溝口三一十一十五
会員納入	郵便口座	岩崎ビル四F
一〇一八〇一七七六八〇四七一		八二九一二一八二〇

第三回  
第四回  
九月一七日  
二二月一七日  
第三回から四回の  
詳細は後ほど連絡します。

二〇〇六年度 環境セミナー  
第二回  
六月一八日  
午前一〇時一午後五時まで  
場所：南北米福地開発協会事務局  
内容  
費用 三千円（昼食付き）  
地球温暖化と植樹の重要性、  
レダ開発について

